

夜光貝岬

高橋 治

夜光貝岬

高橋
治

講談社

初出誌

沖ノ蔵千疊敷（小説現代昭和59年9月号）薩摩ずべい釣り（小説現代昭和60年1月号）夜光貝岬（小説現代昭和60年8月号）

著者紹介

昭和4年千葉県生まれ。東京大学文学部国文科卒松竹。株式会社入社。昭和35年より監督作品、戯曲を発表。昭和40年松竹を退社し、本格的な執筆活動に入る。昭和59年二人の鯛釣り名人を描いた「秘伝」で第90回直木賞を受賞。主な作品に「派兵・第1部」第4部」「絢爛たる影絵」「風の盆恋唄」等がある。

夜光貝岬

定価 一〇〇〇円

第1刷 昭和60年11月15日発行

著者 高橋 治

発行者 野間惟道

発行所 株式会社講談社



〒112 東京都文京区音羽2-12-21
電話 東京(03)945-1111(大代表)

印刷所 豊国印刷株式会社

製本所 藤沢製本株式会社

© OSAMU TAKAHASHI 1985 Printed in Japan.

落丁本・乱丁本は、小社書籍製作部宛にお送り下さい。
送料小社負担にてお取り替えいたします。

目次

沖ノ蔵千疊敷	5
薩摩ずべい釣り	61
夜光貝岬	145

装画／原万千子
装帧／村山豊夫

夜光貝岬

沖ノ蔵千疊敷

一

ああ、眼覚し時計が鳴る。そう思いながら、高原丑三は仰むけに寝たまま右手をのばして旧式な時計の頭についたボタンを押した。その手で時計を引き寄せ、蛍光灯の豆球の光で見ると、果して針が三時半を指していた。

漁師には眼覚し時計は要らない。起きようと思った時刻に眼が覚めないようでは、つとまる稼業ではないのだ。丑三もだから時計のベルが鳴り出すまで寝ていたことはない。眠りに落ちる前に、起きるのはなん時と自分にいい聞かせるために針を合わせるだけなのだが、長年の習慣で止めてしまえないでいる。

丑三は床の上に座った。

巖のような体というが、丑三のそれは厚みだけでなく、座った膝に筋肉の盛り上りが見えるほどたくましく、ほとんど贅肉というものを感じさせない。年齢からいえば、六十歳が眼の先に近づいていて、孫のもりが似合う年頃になっているのだが、体は老いなど近づかせない強さに充ちていた。

ただ、眼だけが優しい。凹んだ柔和な眼の周囲には縦横に無数の皺が走り、その皺の底に、僅かに人間の皮膚の色が残っているが、あとは黒々と陽焼けしている。

とりわけ朝の早い漁師の仕事には、六月下旬から七月にかかる今の季節が一番好ましいものに丑三には思える。雨の日は別だが、朝の冷えこみも日中の暑さの予感もなしに、徐々に体に生気が戻るの

を待つことが出来る。

「はい、お茶」

見計らったように、大ぶりの茶碗に渋茶をなみなみとついで、妻の真沙子が枕もとに座るのも、その時間のきまりきった習慣だった。僅か三、四十分のことだが、丑三よりも早く起き出した真沙子は天候や風向きを告げてくれる。

それを聞きながら、丑三はその日になにを狙うのか、漁場をどこにするのかを考える。その頃には、次第に曇りが吹き払われて来た頭で、堤防を打つ波の強さ、窓をゆする風の吹き加減なども作戦をたてる条件の中に加えている。

だが、床の上に座った丑三の前に茶碗は出て来なかった。三部屋に台所がついたきりの小さな家中に、真沙子が動いている気配はない。

「馬鹿だな、わりや」

唇からこぼれそうになった言葉をのみ下した。真沙子一人がいなくなっただけで、やけに広く感じられる家の中をウロウロと歩きながら、その言葉はもうなんべんとなく口にした。探すもののありかがわからなかったり、使いを頼みなかったり、ごく些細なことが不自由なのだ。そんな不自由さが、自分の利き腕が突然動かなくなってしまったように、真沙子はもう二度とこの家に戻って来ないのだという思いを、丑三につきつけて来る。

「馬鹿だな、わりや」

としかしいようがない。安い切符が手に入ったからといって、なにもまだ雪の残っている北海道ま

で出かけて行くこともあるまい。わざわざ落ちる飛行機に乗って、死んでしまうこともあるまい。その挙句に、俺をこんな目にあわせて。

「ひでえの、われのやってくれたこたあ」

丑三はその言葉ものみ下した。うっそりと立ち上ると、浴衣のままで台所に出て行った。抹茶をのむための湯は昨夜の中にわかつてポットに入れてある。立ったままでのんだ。ひと口のみ下しただけで、その不味さに呆れた。ジャーに炊いて保温してあった飯をむすびに握った。握りはじめてから探したために、塩の入れものも、梅干の容器も飯粒だらけになってしまった。

「洗うのか、拭くだけで落ちるのか」

そう考えただけで、もう見るのもいやになった。早々に手を洗い、海苔だけは綺麗になった手でむすびに巻きつけた。巻きつけたとしかいいようのない不様な出来だが、気にしないことにして、籐で編んだ弁当籠につめこんだ。

寝室に戻って、着替えを探すために押入れをあけた。真沙子が死んでから、僅かひと月余りしかたっていない。だが、その間に、汚れたものも洗ったものも、区別もせずに押入れの下段にぶちこんでいる。

頭の隅で今日は雨になるかも知れないと丑三は考えている。ズボン下をはいて行った方がいい。海でぬれそぼった寒さは、吹かれた時の寒さなどとは較べものにならない。だが、ズボン下は見当らなかった。

そうかと思ひ出して、押入れの反対側をあけた。下着ダンスの引出しのひとつに、「お父さんの下

着^がと書いた紙が貼^はつてある。お父さんの下着か、と思いながら丑三は引出しを引いた。四、五枚の冬用の厚手^{あつで}のシャツが入っているだけで、ズボン下は一枚もなかった。

港から出て行く漁船のエンジンの音がもう次々に丑三の耳に聞えて来ていた。

静岡県下田市の須崎^{すさき}港では、丑三に並ぶ漁師はいないといわれている。そんな自分が六十歳近くにもなつて、仕事に着て行くものも探せずにいる。丑三は見たくもないものを閉じこめてしまうように襖^{ふすま}をしめた。

「馬鹿だな、わりや」

ついさっきこらえたばかりの呟^{つぶや}きが唇を洩^もれた。

「もう三十五日も過ぎたのによう」

昨夜、一升^{しやう}ビンを提^さげて、急な坂道をのぼつて来た甥^{はな}の国夫^{くんとお}はそういった。丑三の家は須崎^{すさき}の家並^{やなみ}を見下す鎮守^{ちんじゆ}の社^{やしろ}のすぐ隣にある。丑三は真沙子が一人で切り廻^{まわ}していた民宿宮下^{みやげ}荘の二階に座っていた。住居に並べて建てられた民宿用の別棟は、それでなくても狭い庭をいっそう狭くしてしまったが、アルミサッシの窓^{まど}ごしに見渡す港の眺^{なが}めが抜群に良い。

丑三は真沙子が生きていた時分から、夕食がすむと、百円玉を二、三枚握^{にぎ}つてその二階の部屋にのぼつて行つた。新しいだけこちらのテレビの方がうつりがいい。百円で二時間テレビが見られる機械に金を入れ、丑三は巨人軍の試合を見ながら、港を出入りする船のエンジンの音に振り向いて、仲間たちの動きを確かめるのだ。それには大した意味もないし、誰にそうしてくれと頼まれているわけ

でもない。だが、誰が夜釣に出ているかぐらいのことは知って置かなければ、丑三の気性が許さない。

「また、敗けてるのけえ」

国夫はそういうと、両端が下り気味でへ字になった唇で舌打ちして洗面所に立って行った。そこに客用に置いてあるプラスチックのコップを二つ持って来ると、酒をつぎ丑三の前の座卓に置いた。

「あんな坊やに四番打たしてちゃ具合悪いな」

巨人びいきの丑三の顔色を読むように見た。

「王や長島の時代はもう来ねえな。あの衆は考えてみりゃえれえもんだったな」

丑三の口調が思ったより明るいことに国夫は勇気づけられたようだった。幾分、座り直すような形で、丑三の方に向き直った。

「なあ、オジキ、叔母ちゃんのことでは気分が乗らねえのはわかるけどよ、三十五日もすぎて、漁にも出ねえってのは、オジキらしくねえぞら」

「……ふん」

丑三は鼻を鳴らしただけだった。

国夫が自分のことを心配しているのはよくわかっていた。丑三の兄が早く死んだために、高校を出たばかりの時から、手をとるようになって漁を国夫に仕込んだのは丑三だった。

その上、丑三の一人息子の清治より二歳年長の兄貴分というせいもあって、子供の頃から国夫はど

ちらが自分の家かわからないような育ち方をした。はた目には兄弟としか見えない二人なのだ。国夫は国立の大学を出て東京の商社に勤める清治を高く評価し、清治は清治で、国夫が側にいる限り、親のことは心配ないと考えているふしがある。

清治は滅多なことでは丑三に電話をして来なかったが、国夫には折にふれて電話をかけて丑三の様子を聞いているらしかった。今日の話も大方清治に頼まれて様子を見に来たのだろうと丑三は見当をつけている。

「三十五日までというのはわかんのさ。おらたちのやつてゐたあ、なんといつても殺生だからの。でも、もう、オジキらしいことを始めてもいい頃じゃねえのか。見て歯がゆいわけよ。……のう」

それはそうだろうと丑三は思った。歯がゆいというのなら、丑三自身が一番歯がゆい思いでいる。漁師にとって、女房に死なれることが、これほど身にこたえるものだと、丑三も考えても見なかった。港に帰って来れば、待っていた真沙子（まご）がもやいをとってくれる。釣って来た魚を組合に揚げて帰れば風呂がわいている。潮をかぶった合羽（かっぱ）は玄関口に投げ出して置けば、真沙子が水洗いしてほしてくれる。明日の魚を、人よりもどうすれば一匹でも多く釣れるかを、丑三は考えていればすむのだった。やりなれないことを全部自分でしなければいけないと思うだけで、気が滅入（めい入）って来る。煮たきなどということは漁師には苦にはならない。沖泊（おきどまり）りの釣りもあれば、若い時分は魚を追って相模湾でも房（ぼう）州（しゅう）でもいくらかでも遠征に出かけて行ったものだった。

現に真沙子に死なれたあとも、三度の食事だけはきちんと自分で作っている。魚が食いたいと思えば、自転車を出かけて行って、下田港にかけられたみなと橋の上から鰻（うなぎ）を釣って来れば用が足りた。

なにせ名だたるプロがやることなのだから、鰻のように貪欲な魚なら、ひと晩の中に隣近所に配るほど釣れる。さいて焼き上げることも、ちっとも面倒とは思わない。

だが、仕度を整えて海に出て行くことが気が重いのだ。国夫が考えているように、三十五日までの殺生を懐んでいたわけでもない。それを丑三らしくないといわれればその通りなのだが、説明する気にもなれなかった。して見たところで、国夫の若さでそれがわかるとも思えない。

丑三は黙って酒をのんだ。

「この民宿の方はどうしん気だ」

「こんなもの」

「そうも行かねえぞら」

「客の電話なんか、みんな断ちまってるだよ」

「この商売も本気でやりゃあな」

「おらにそんなことは出来ねえな」

丑三は吐き出すようにいった。民宿といっても、客がたてこむのは夏休みの間だけのことで、普段は週末にポツリポツリとドライブがてらのアベックが魚を食いに来る程度なのだ。

「オジキが釣客をとりゃ、民宿の商売もえれえのにな」

国夫は真沙子が商売を始めた時にもそういった。国夫のいう通りなのはわかっている。ここ十年ほどの釣ブームで、須崎の漁師たちの中にも遊漁船の許可を持つものがふえた。専業に転じてしまった仲間もなん人があった。客をとれば、釣れる釣れないに拘らず、一定の備船料だけは入って来る。丑

三も年齢だから楽な商売を考えた方がいい。その上、漁場や漁法に抜群の技倆と知識を持っている丑三なら、予約を捌ききれないほど客が来て民宿の方も繁昌する。国夫はそんなことを遠廻しにいつているのだった。

「そうけえ」

丑三はその時そう答えただけで話には乗らなかった。このとしになって、なぜ海の上に出てまで客の機嫌をとらなきゃならないのだと丑三は考えている。二人の子供を抱えた清治からの仕送りはないが、丑三の稼ぎだけで真沙子と二人が食うのには困らない。元々は民宿商売も真沙子が人づき合いが好きなところから始めたもので、経済的に必要があつてやり出したわけではなかった。

そこからの儲けは、五十歳をすぎた頃から急に旅行好きになった真沙子の費用にあてられたのだが、それがもとで本人が死んでしまうことになった。苦勞のさせ通しだった老妻が、自分で得た収入を自分の楽しみにつかうのに文句をいう筋合いはない。丑三はそう考えていたのだが、そんな考え方があだになったような気がする。ことがある。

「こんなものはかかあが勝手にやったことだから、おらには関係はねえだよ。われになんていわれようと、おらは釣客なんかとる気はねえからの」

先を封ずる気で、丑三は国夫にそういった。

「いや、今夜は頼みごとがあつて来ただよ」

国夫はすらすらとかわして別なことをいった。

「明日一日でいいから、おらの船に乗って貰えねえろか」